

『映像きもの学2008』—全26巻

足立 奈々 上原亜理紗 木本絵梨子 坂口 大和
 武田 翔大 谷川 歩 中村 楨

(深井 勉ゼミ)

1. 「きもの学」講座の趣旨

きものは、日本の歴史と風土を背景に、文化・芸能・行事と密接な関わりを持ちながら発展を遂げてきました。即ち、日本の豊かな自然と人の共生を重んじる生活文化の下で、鋭い感性と美意識に支えられ、世界に類を見ない優雅にして繊細な世界を創出してきました。作家や職人の断えまない研鑽によって生み出された多彩な意匠や染織技術は、正しく日本文化そのものと言えます。この講座では、きものときもの文化にまつわる染織の世界を通して、日本文化に関心を持っていただくことを目的に、日本を代表する染織作家、研究者、伝統文化、流通等でご活躍の方々を講師にお迎えし、多面的に学んで頂くことを目的に開講します。

(2008『きもの学』実施要綱)

2. 「きものの歴史」

着物は古代から人々の生活に則して形を変え、日本の風土、文化に対応して現代の形になりました。着物の歴史は私たち日本人の生活様式そのものです。

古代、縄文時代には貫頭衣(かんとうい)という一枚布や毛皮などに頭を通す穴を開けて着ていました。大和朝廷時代には進化して、よく教科書で見かける埴輪(はにわ)の衣服のような筒袖で襟を前で合わせる形になります。下には現代のズボンのようなものを履いていました。飛鳥時代から奈良時代にかけては、衣服も唐文化の影響を強く受けます。着物が優美さをもつようになるのもこの時代からです。イメージは、男性が聖徳太子のような格好。女性は竜宮城の乙姫様のような格好です。この頃から大きな袖の広袖の衣装になっていきます。9世紀に遣唐使が廃止されてからは、平安時代に国風文化の高まりと共に、より日本の風土に適した着物となっていきます。公家好みの優雅な服装となり男子の束帯、女子の十二単が誕生します。気候に合わせた重ね着は、その色を変えていくことで優雅さを増し、その重ね着の多さによって、権力、威厳、地位を示すものでもありました。

その後、鎌倉・室町時代には武士が台頭してきました。庶民の服装には、現代の着物の原型となる小袖が登場してきます。戦国時代を経て安土・桃山時代には、美術工芸技術の目覚ましい発達がありました。着物の染色技術、箔縫いの高い技術により豪華絢爛な着物も上流階級に登場します。そして江戸時代です。三百年という長い間、外国との交流を避け、鎖国の中で、日本特有の文化が育っていきます。特に町民文化の発達がめざましい時代でした。貴族、武士に加え、裕福になった町人は、財力を生かして服飾に凝るようになります。町人の着物は、小袖に、友禅染めをはじめとする美しい染め模様や、縫い模様をあしらひ、贅沢さを増していきます。この町人の着物が現在の着物の形をほぼ整えます。公家や、武家では、依然、時代装束が尊ばれていきます。江戸時代中期には、帯の長さも幅も増し、様々な帯結びもできるようになります。着物の形態はほぼ江戸時代に決まりました。

その後、歴史の変動、西洋文化の合流によって、素材や模様は影響を受けていきますが、形はほぼ変わりません。明治時代、開国後、洋服文化がなだれこみます。

次第に日常着は洋服にとって変わられます。大正、昭和と戦争の時代に着物はいったんその姿を潜めませんが、着物は現代にいたっても尚、日本人に親しまれている衣服であり続けています。それはもはや生活着ではなくなったものの、様々な用途によって使い分けられる非日常着として今も尚生き続けています。着物は、晴れ着として、舞台衣装として、芸術品として、私たちの美意識の根底には着物は欠かせないものなのです。

(着物 着付け ～楽しいきものリンク集～ <http://coquette.fem.jp/> より抜粋)

3. 「きものの特長」

和服は直線裁ちであるので、洗い張り、仕立て直しを繰り返して行うことができます。汚れたり色があせたもの、また年齢にあわなくなったものなどは、染め直しをして、再生させることが出来、先染（さきぞめ）織物などで、染め直しができないものは半纏（はんでん）、ふとんなどへと利用することもできます。こうして着物の寿命を保たせ、親から子へ、子から孫へと着用の可能性のある限り受け継いでいくことも、その心遣い一つでできるという特長を持っています。なお、和服は、体型をカバーし美化する特長を持っています。また巻衣式筒型であるから、とくに下半身の保温に適しており、冷えを防いだり、帯を簡略化すれば着脱が便利になり病人にも適応し看護もしやすい衣服です。

(『日本大百科全書』平凡社)

4. 「きもの改良」

男子の服装は明治初期から、軍人、官公吏、学生と順を追ってしだいに洋服化されたが、女の服装は江戸時代以来の着物生活であったため、新しい社会生活に適しない面が目されるにいたった。1899年医学者ベルツの、日本の女子の体格が悪いのは帯によるという意見に基づき、女学生が袴を採用するようになったのはその一例である。一般の着物については、1902年の実践女学園校長下田歌子らが改良の必要を説き、試案を出したのが始まりである。東京女子体操音楽学校校長藤村トヨは女の着物の欠点を科学的に研究し、1915年に一種の改良服を作ったが、それは朝鮮服に近いもので、広く用いられずに終わった。しかし1923年の関東大震災で着物の欠点が暴露されてから、社会的関心が高まり、そのことから改良運動はようやく盛んとなった。みやこ腰巻やズロースの着用が叫ばれ、腹合わせの帯や名古屋帯が生まれたのはこのころである。しかし封建社会の〈女らしさ〉の要求から生まれた拘束的な女帯や不自由な袖や歩行をしる裾がバランスを保って総合的な女の着物を成立させている限り、これらの部分的な改良の試みは本質的な機能性を取り戻すことができず、昭和初めころから次第に洋服にとって代わられるようになった。

第2次世界大戦が始まると、女の着物は強制的に改良が加えられた。袖は1尺くらいの元禄袖にきめられ、また、それまで2丈8尺から3丈3尺あった着尺地丈を、2丈5尺にして長い袖を作れなくした。また上着と下着からなる二部式の婦人標準服を制定したが、この強制的な改良は戦争中だけのものであった。戦後は、従来の女の着物の欠点を改め、機能、衛生、経済の面から改良を加えるとともに、近代感覚をとりいれ国際性をもたせる試みがさまざまになされてきたが、先に述べた改良運動の歴史が示すように、帯、袖、裾を否定しえない〈着物〉の特性は機能性と調和しえないため、現在ではおもに社交用、儀式用、趣味的な衣服にとどまっている。

(『大百科事典』平凡社)

『映像きもの学2008』 全26巻

2008「きもの学」講義内容

8月26日(火)～9月13日(土)

火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
8/26	8/27	8/28	8/29	8/30
きもの概念① 「日本人の衣生活ときもの」 「日本のきもの」 編集・発行人 日本きもの学会 常任理事 清田のり子	きもの概念② 「きもの歴史」 華頂短期大学 教授 馬場まみ	きもの概念③ 「女性のきもの」 日本きもの学会 理事 東洋ファッションデザイン専門 学校／東洋きもの専門学校 校長 樹下林子	きものできるまで① 「縦織と小巾絹織物 (丹後ちりめん)」 ポリテクカレッジ京都 元講師 芋田機業場 代表者 芋田 薫	きものできるまで② 「織のきもの」 京都伝統染織学芸舎 主宰 日本きもの学会 常任理事 富山弘基
		きもの概念④ 「男のきもの」 日本きもの学会 常任理事 着物伝承家 早坂伊織		きものできるまで③ 「西陣の帯」 泰生織物㈱ 専務取締役 酒井貞治
9/2	9/3	9/4	9/5	9/6
きものできるまで④ 「染のきもの」 きもの染色技術 研究者 生谷吉男	きものできるまで⑥ 「和裁」 にっぽん着デザイン研究所 京都市生涯学習総合センター (京都アスニー) 講師 横山ちとえ	■実地研修① 西陣織(西陣織会館) 友禅染体験コース (友禅美術館古代友禅苑) ■特別講座② 織物の技術と文化 川島織物文化館 館長 森 克己	源氏物語 恋の場面におけるきもの効果 京都学園大学 人間文化学部教授 山本淳子	十二単・束帯 きもの研究者 石田和子 乾 朝子
きものできるまで⑤ 「輝けるきもの美」 (社)日本染織作家協会 理事長 五代田畑喜八	消費者に伝えたい 「きもの」の魅力 (株)銀座もとじ 代表取締役社長 泉二弘明	テスト	和歌の世界 (財)冷泉家時雨亭文庫 常務理事 冷泉貴実子	
9/9	9/10	9/11	9/12	9/13
衣装概要 -きもの歴史・通過儀礼- 服飾評論家 市田ひろみ	有職織物と文様 (財)西陣織物館 顧問 藤井健三	実地研修② ・源氏物語ミュージアム ・宇治上神社 ・平等院	暮らしの儀式作法 -その心とききたり- 儀式作法研究会 代表 岩上力	日本の色 染司よしおか 当主 吉岡幸雄
源氏物語と香 源氏物語千年紀によせて 香老舗松栄堂 社長 畑正高	「きもの」を取り巻く経済・社会 環境 京都学園大学 経済学部教授 尾崎タイヨ		御所人形の世界 有職御人形司十二世 伊東久重	2008きもの学まとめ 日本きもの学会 会長 京都学園大学 学長 波多野 進 他

もの概念① 「日本人の衣生活ときもの」

日本きもの学会 常任理事

「日本のきもの」 編集・発行人 清田のり子

日本人にすっかり定着した洋服生活の中で、今一度、世界の中の日本の特異性とその中で育まれてきた衣服文化である「きもの世界」を探ります。

きもの概念② 「きもの歴史」

華頂短期大学 教授 馬場まさみ

日本のきものは、世界的に特異な形態と装飾が見られる衣服だといえます。どうして、このような独特な衣服様式が生まれたのでしょうか。また、どのような歴史があるのでしょうか。染織品や衣服の歴史・美しさについて学びます。

きもの概念③ 「女性のきもの」

日本きもの学会 理事

東洋きもの専門学校/東洋ファッションデザイン専門学校 校長 樹下 林子

「女性のきもの」についての基礎知識と新しいきもの提案について説明します。

きもの概念④ 「男のきもの」

日本きもの学会 常任理事

着物伝承家 早坂 伊織

「男のきもの」の注目がますます高まっています。和文化に親しむにも、日本人としての心に触れるにも、「きもの」は日本文化共通の財産です。「きもの基本」に対する考え方、文化、教養実技など多彩な内容で「男のきもの」を学びます。

きものできるまで① 「繊維と小巾絹織物（丹後ちりめん）」

ポリテクカレッジ京都 元講師

芋田機業場 代表者 芋田 薫

綿・毛・麻そして、繊維の女王と称される絹糸の素晴らしさと、きもの原点である絹の歴史を学習します。後半は、小巾絹織物（丹後ちりめん）の製法や歴史と未来について学びます。

きものできるまで② 「織のきもの」

日本きもの学会 常任理事

京都伝統染織学芸舎 主宰 富山 弘基

日本は染織の宝庫です。全国産地には風土に根ざした伝統織物が数多く存在します。こうした現代日本の織物分野の構造と文化的な系譜、生産状況を学びます。

きものできるまで③ 「西陣の帯」

泰生織物（株）専務取締役 酒井 貞治

西陣織は、20人余りの頭脳と技が集まって「分業制」によって創り出されます。その工房あらまじと、特に帯の文様がどのように生まれ、帯に織り込まれていくのか、その流れを学びます。

きもののできるまで④ 「染のきもの」

きもの染色技術研究家 生谷 吉男

染のきものが染上がるまでの過程と染色技法のやさしい理論から染色技法ごとの特長を解説し、染色堅ろう度についても触れます。

きもののできるまで⑤ 「輝けるきもの美」

(社)日本染織作家協会 理事長 五代田畑喜八

現代のきもの歴史を辿りながら「きもの美の世界」を探求し、未来を展望します。
—京友禅を中心に—

きもののできるまで⑥ 「和裁」

につぼん着デザイン研究所

京都市生涯学習総合センター（アスニー）講師 横山ちとえ

和服の種類（特にきもの形の違い）について考え、「くらしの中に生きる和服」を学ぶと共に、きものをすっきりと着こなすために必要な、体型に合った和服寸法（サイズ）の割り出し方・裁断の方法・仕立て方（縫製）など和裁の基本を学びます。

消費者に伝えたい「きもの」の魅力

株式会社銀座もとじ 代表取締役社長 泉二 弘明

銀座もとじが何よりも大切にしてきたのは、「お客様の心」と「つくり手の心」です。

21世紀の今、環境にやさしい、和の文化が見直されている中、きもの魅力・モードとしての魅力を語ります。

「源氏物語 恋の場面におけるきもの効果」

京都学園大学 人間文化学部教授 山本 淳子

「源氏物語」でくり広げられる数々の恋の場面で着物（装束）が、どのように効果的に活かされるかを味わっていただきます。

「和歌の世界」

(財)冷泉家時雨亭文庫 常務理事 冷泉貴実子

冷泉家は歌聖と呼ばれた藤原俊成・定家を祖とし、和歌の家系として歌道を今に伝えています。日本の古典文様の元となる美意識は、和歌の世界と共通するものです。その和歌を訪ねて、日本の季節の美と日本人の美意識を探ります。

「十二単・束帯」

きもの研究家 石田 和子

「源氏物語絵巻」などの絵巻物に描かれた衣服は、平安時代の重要な日本の衣服であり、それ以降も朝廷・幕府等の儀式に用いられ、着装法や着装する儀式と装束の相関に様々な時代的変化を経たものの、形状等の基礎的な部分については、現在においても承継されています。十二単・束帯を始め、平安時代の皇族・貴族の衣服について学びます。

「衣装概要—きものの歴史・通過儀礼—」

服飾評論家 市田ひろみ

きものを知るには、先ずはきものの歴史を知ることです。私たちの祖先は時代ごとにどのような衣服を着ていたか、今日に至るきものの歴史を概観すると共に、子供の誕生から、成人式を迎えるまでの行事から人生の通過儀礼について学びます。

源氏物語と香り—源氏物語千年紀によせて

香老舗松栄堂 社長 畑 正高

我が国の香り文化を考える時、源氏物語は、“香りの聖典”と気付かされます。王朝の宮人達がつくり出した、香りが彩る四季の暮らしの工夫の中には、今日の日本文化を考える上で、立ち返るべき本質がたくさんちりばめられています。

「有職織物と文様」

(財)西陣織物館 顧問 藤井 健三

日本の自然と、平安時代の朝廷を中心に貴族の高雅な美意識によって、「有職織物と文様」が創造されてきました。柔和な質感、穏やかな色調、親しみやすい文様、いずれも上品な味わいを漂わす、もっとも日本的な織物が有職織物です。一千年前から多くの人々に愛され、現在もいろいろな分野で用いられている「有職織物と文様」について学びます。

「きもの」を取り巻く経済・社会環境

京都学園大学 経済学部教授 尾崎タイヨ

きものの需要は、社会構造の大きな変化と密接に関連しています。社会・経済の枠組みがどう変化したか、それがきもの市場にどう影響しているかを「2008きもの市場調査データ」から解説します。

「暮らしの儀式作法—その心としきたり—」

儀式作法研究会 代表 岩上 力

儀式作法をベースに人と人との温かい触れ合いや気配りなど、いつの時代にも忘れてはいけない優しい心を「きもの文化」とリンクして学びます。

「御人形の世界」

有職御人形司十二世 伊東 久重

御所人形は江戸時代中期に大成され、宮中をはじめ、公家や大名家の慶事や出産・結婚など、さまざまなお祝い事の際に飾られた人形です。御所人形の世界から見た「きもの文化」について学びます。

「日本の色」

染司よしおか 当主 吉岡 幸雄

源氏物語を読んでいくと、その物語の面白さと共に、季節の彩り、女人たちの衣装などの王朝の美が浮かび上がってきます。植物染料によって伝統の色を再現されている立場から「日本の色」について学びます。

2008きもの学まとめ

日本きもの学会 会長

京都学園大学 学長 波多野進 他

キーノートスピーチできもの学講座の総括を行い、ゲストによる自由な語り合いとともに「きもの/その未来」を予測します。

「きもの学」の中継・録画スタッフ



映像を見ながら指示を出すPD (SW) と音量調整のミキサー



講義風景と中継時のカメラマン



大学での中継とPD (SW) のリハーサル風景



<中継・録画スタッフメンバー>

2005M001	足立 奈々	2005M073	武田 翔大
2005M014	上原重理紗	2005M076	谷川 歩
2005M041	木本絵梨子	2005M088	中村 槇
2005M059	坂口 大和		

<「きもの学」の撮影にあたって>

きもの学を撮影するにあたって、事前に大学での機材の操作、カメラワークのリハーサルを行った。しかし、最初はまだぎこちなさがあったが、みんなで真剣に取り組んだので講義期間中、特に問題なく撮影を進めることができた。

<制作スケジュール>

リハーサル 2008年8月25日(月)
朋文館 1階ロビー

中継撮影 2008年8月26日(火)～9月4日(木) 基礎講座
キャンパスプラザ京都4階 第2講義室

2008年9月5日(金)～9月13日(土) 発展講座
キャンパスプラザ京都4階 第2講義室

編集作業～完成 2008年9月～2009年1月
朋文館1階編集室, 2階コンピュータ教室にて編集作業
マルチスタジオにてテロップ作成, ミックスダウン作業
資料収集, キャプション原稿作成, 作品完成

<カメラ及びマイクロフォンの配置とその役割>

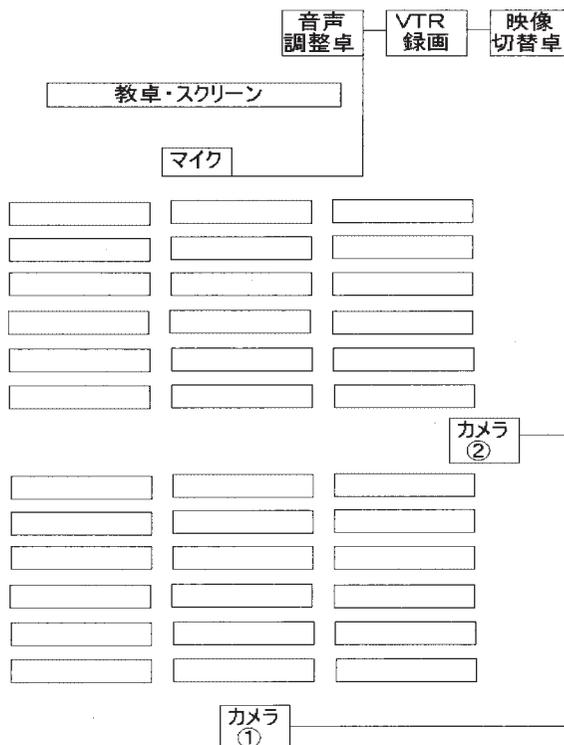
カメラ①…会場全体, 講師,
スクリーンの撮影

カメラ②…講師, 資料, 受講生の撮影

ミキサー…音量調節, 講師マイク

P D…撮影指示

S W…映像切り替え



作品概要

1. きもの概念①

日本きもの学会 常任理事

「日本のきもの」 編集・発行人 清田のり子

「日本人の衣生活ときもの」



あなたはきものにどの程度関心がありますか？等の質問から授業が始まりました。明治維新から140年、わたしたちの日常生活はすっかり洋服が定着しましたが、一方では、昨今、「きもの」への関心が深まっています。その代表としては夏に着る「ゆかた」です。進化をしている「ゆかた」から考え、現代にきものを着る意味を一緒に考えました。

2. きもの概念②

華頂短期大学 教授 馬場まさみ

「きもの歴史」



平安時代から近代にかけてのきもの歴史で、どのような服装をしていたのか。どのようにして装飾していたのか。また、社会的存在としての衣服は、何を表現してきたか。平安時代の男女の衣服の違いや中世・江戸時代の服飾について、近代化と服飾について、といった様々なきもの歴史を学びました。

3. きもの概念③

日本きもの学会 理事

東洋きもの専門学校／東洋ファッションデザイン専門学校 校長 樹下林子

「女性のきもの」



女性のきもの採寸法や着物の名称、きものTPOそれに比べ洋服の採寸と名称、素材、洋服のTPOときものと洋服の違いを実際に見ながら学んでいきました。また、伝統の良さに新しい風を積極的に取り入れる新しい着物の提案では効果的な色使いやデザインの面白さ、カジュアルなコーディネートを学びました。

4. きもの概念④

日本きもの学会 常任理事
着物伝承家 早坂 伊織

「男のきもの」



きものと言えば、女性が着るというイメージが強いですが、最近では「男のきもの」の注目度がますます高まっています。この講義では、「男のきもの入門」とし、知っておきたい和服のポイントや種類、マナーといった基礎知識から着物の着方のポイント着くずれの直し方まで、多彩な内容で「男のきもの」を考えました。

5. きもののできるまで①

ポリテクカレッジ京都 元講師
芋田機業場 代表者 芋田 薫

「繊維と小巾絹織物（丹後ちりめん）」



白生地の代表的製品である丹後ちりめんの出来るまでを蚕や生糸、繭を実際に見ながら学んでいきました。蚕から生糸ができるまでの細やかな話や生糸から白生地（丹後ちりめん）ができるまで、そして白生地の種類といった「きもの原点」である「糸から白生地」について学びました。

6. きもののできるまで②

日本きもの学会 常任理事
京都伝統染織学芸舎 主宰 富山弘基

「織のきもの」



きものにおける大切な分野である「織り」について学びました。現代日本で伝承されている主要な「織りきもの」の地域分布とその種類・歴史について長年の研究に基づいて解説していただきました。

7. きもののできるまで③

泰生織物（株）専務取締役 酒井 貞治

「西陣の帯」



京都を代表するきもの産業の一つである西陣織について学びました。西陣織は「分業制」であり、20人余りの頭脳と技が集まって創り出されています。西陣織の工程概要と、特に帯の文様がどのような工程を経て織り込まれていくのか、流れに沿って学びました。

8. きもののできるまで④

きもの染色技術研究家 生谷 吉男

「染のきもの」



きものを創る立場からではなく、着る立場からやさしい染色の仕組み、様々な染色の技法とその特長、また、仕上げ加工や染色堅牢度などについて学びました。

9. きもののできるまで⑤

(社)日本染織作家協会 理事長 五代山畑喜八

「輝けるきもの美」



「きもの」は素材と色と文様が中心であるが、その代表の一つである京友禅が京都で生まれた理由—水と地の利、そして「華主」について一緒に考えました。

10. きもののできるまで⑥

にっぽん着デザイン研究所

京都市生涯学習総合センター（アスニー）講師 横山ちとえ

「和裁」



くらしの中で生きる「身近な着るもの」として、衣服の構造を理解し、和服の原点を探りました。日本人が失いつつある和服のくつろぎ着と仕事着の違いや、その人の体型にあった着物の選び方を実際に着物を見ながら学びました。

11. 消費者に伝えたい「きもの」の魅力

株式会社銀座もとじ 代表取締役社長 泉二 弘明



講師泉二弘明さんが、なぜ「きものの道」に入ったのか、銀座もとじが出来るまでの会社の様子や経営理念を細やかに説明していただきました。また、「お客様の心」と「つくり手の心」を結ぶためにしていることや、銀座もとじの今取り組んでいることなどを学びました。

12. 「源氏物語 恋の場面におけるきもの効果」

京都学園大学 人間文化学部教授 山本 淳子



源氏物語の「空蝉」巻の場合は欠点を隠す着こなし、「賢木」巻の場合は光源氏の下着姿、「衣服と個性」は規則順守か、似合い不似合いか等、源氏物語の本文を見ながら細かく説明していただきました。

13. 「和歌の世界」

(財) 冷泉家時雨亭文庫 常務理事 冷泉貴実子



源氏千年紀の今年は、その「源氏千年紀」の意義について一緒に考えました。また源氏物語が、日本に与えた影響や和歌と源氏物語の美について学びました。

14. 「十二単・束帯」

きもの研究家 石田 和子



平安貴族の男性装束について、平安貴族の女性装束について、着付け方法や名前、装束の説明、また平安貴族達の日常生活や、遊び・メイク・髪型・持ち物・車の色々等、衣装を通しての説明を細やかにしていただきました。

15. 「衣装概要—きもの歴史・通過儀礼—」

服飾評論家 市田ひろみ



きものを知るには、先ずきもの歴史を知ることからということで、私たち日本人の祖先は時代ごとにどのような衣服を着ていたのか、3世紀卑弥呼の衣服から現代まで今日に至るきもの歴史を学び、概観する中からきもの価値を一緒に考えました。

16. 源氏物語と香り—源氏物語千年紀によせて

香老舗松栄堂 社長 畑 正高



香の歴史にそって、有名な作品である清少納言の「枕草子」、紫式部の「源氏物語」を学びました。授業内でお香を焚いて頂き、香りという新たな視点で「枕草子」「源氏物語」を学ぶことが出来ました。

17. 「有職織物と文様」

(財)西陣織物館 顧問 藤井 健三



平安時代の朝廷を中心に貴族達の美意識によって創造された有職織物ですが、質感・色調・文様と、いずれも上品な味わいを漂わし日本人に親しまれて来ました。昔から親しまれる理由は一体何なのか？織技・文様などを中心に学びました。

18. きもの市場調査

京都学園大学 経済学部教授 尾崎タイヨ



経済・社会環境の変化や、最新の家計調査・所得階層・家族の属性・地域等様々な観点からきもの特長に触れました。きものへの支出や職業ときものを買う人との関連性、また地域ときもの関係なども学びました。

19. 「暮らしの儀式作法—その心としきたり—」

儀式作法研究会 代表 岩上 力



どうして儀式作法は生まれたのかという儀式作法の心と意義を儀式作法の誕生、水引・のし・紙折の約束事に触れながら解説。また、人生の通過儀礼（慶弔）については金封の選び方と表書きなどを含めてその心としきたりを学びました。

20. 「御人形の世界」

有職御人形司十二世 伊東 久重



遺跡から発見された世界最古の人形に始まり、造形的に人形に近いものや古来の宗教儀式や習慣から生まれてきた日本の人形の歴史、さらに、愛玩用の人形（御所人形）の誕生について細かく説明していただきました。

21. 「日本の色」

染司よしおか 当主 吉岡 幸雄



源氏物語のように有名な文学は物語の面白さとともに登場人物の衣装についても注目が集まります。当時の伝統的な衣装の色を植物染料を用いる技術で再現されているという立場から「日本の色」について詳しく学びました。

22. 2008きもの学まとめ

日本きもの学会 会長
 京都学園大学 学長 波多野 進 他



キーノートスピーチで、きもの学講座の総括を行いました。
 ゲストによる自由な語り合いとともに、「きもの／その未来」
 予測しました

終わりに

今回この「きもの学」講義の撮影に参加し、講義中のカメラの中継・録画・音声、どれも普段は関わることのできない貴重な体験ができた。「きもの学」を撮影するにあたって事前に中継機材の操作、カメラワークのリハーサルをした。本番では準備の段階からそれぞれが役割分担を決め各箇所の準備をした。カメラ担当はカメラを素早くセッティングし、ミキサー担当はマイクを設置し音量調整、ディレクター・スイッチャー担当は時間までに準備が完了するように指示し、またカメラから送られてくる映像の色や明るさの調整などを行った。リハーサルと各個人の頑張りもあり、「きもの学」の撮影期間中は問題なく撮影・録画を進めることができた。

「きもの学」の講義が終わり10月から本格的に編集に取り組んだ。ダビングし、ダイジェスト版編集、文書作成をメンバー全員で作り上げた。この7人で1つの作品を作り上げるのは初めてで、メンバー全員が役割を分担しながら一つのものをみんなで作り上げることにより、チームワークの重要性と作り上げた時の喜びを実感した。

最後に、この「きもの学」の講義に参加して、今では普段生活しているとあまり関わることのない「きもの」。その「きもの」の知らなかった歴史や、「きもの」の魅力を再認識するいい機会になったと思う。

謝 辞

この映像「きもの学」の制作にあたり、本学経済学部・大西辰彦教授をはじめ、社団法人・全日本きもの振興会と「きもの学」講師の先生方、大学コンソーシアム京都の関係各位にご指導、ご協力いただいたことに感謝と御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 2008『きもの学』実施要綱
 2008『きもの学』レジュメ
 着物 着付け ～楽しいきものリンク集～ <http://coquette.fem.jp/>
 『日本大百科全書』 小学館
 『大百科事典』 平凡社